

4 東日本／西日本の境界 ～人や情報の交流でゆらぐ?～



小池 悠介
KOIKE Yuusuke

糸魚川市教育委員会 事務局 文化スポーツ課／学芸員

東西に長い日本では、暮らしや言葉、食文化に多様な違いがあり、その分岐点の一つが糸魚川付近に生まれた「東日本」と「西日本」の境界である。この境界周辺の実像を紹介しつつ、社会や生活の変化によって境界がゆらぐ可能性にも迫る。

糸魚川市は新潟県の最西端に位置する(図1)。市域を囲む山々の大半が「妙高戸隠連山国立公園」「中部山岳国立公園」「白馬山麓県立自然公園」に指定され、豊かな自然を有している。

市域の中央を北流する姫川の支流の一つの小滝川と市域の西側を流れる青海川の上流には、ヒスイの原産地があり、「小滝川硬玉産地」「青海川硬玉産地」として国の天然記念物に指定され保護が図られている(写真1)。全国で唯一の宝石質のヒスイの産

地として知られ、縄文時代前期(約6,500年前)に利用が始まった世界最古級のヒスイ文化発祥の地で、奈良時代まで全国で糸魚川産のヒスイが利用された。

このような大地の歴史、豊かな自然とその上に成り立つ人々の文化・生活を守り、生かす活動が評価され2009(平成21)年に日本初の世界ジオパークに認定されている。

糸魚川の地質・地形

姫川は、日本列島を地質的に東西に分断するフォッサマグナの西端にあたる糸魚川―静岡構造線に沿うように流れることでも知られている(写真2)。

姫川以西の山々は古生代や中生代の地層から成り、飛騨変成岩帯では、角閃石、蛇紋岩などの変成岩とヒスイなどの希少鉱物の産出で知られている。また、明星山と黒姫山一帯は石灰岩から成り、黒姫山一帯はカルスト地形で知られ、豊富な石灰岩は麓における化学工場、セメント工場の営みを支えている。

一方、姫川以東は新生代の地層から成り、山々の様相あるいは河床や海岸の礫などは、姫川以西とは大きく異なっている。

東日本と西日本の境目

東西に長い国土を持つ日本では、しばしば「東日本」「西日本」という言葉で国を東西に分けられる。



写真1 小滝川硬玉産地



写真2 姫川と糸魚川―静岡構造線

この「東日本」「西日本」は地理的に日本を分けるだけでなく人々の生活や習慣、言葉や食文化など様々な差異をもたらしている。これらの東西文化の境目は日本海側では糸魚川付近で多く見られる。例えば、電気の周波数、正月の雑煮餅、年取り魚、出汁の素材、肉の好み、ポリタンクの色などが東と西で異なる(表1)。

ただ、これらの差異は完全な分断ではなく、徐々に変化する境界(グラデーション)が形成されている。糸魚川はそのグラデーションの中にあり、言葉のアクセントや食文化などが混在し、文化がぶつかる場所ではなく、混在する場所となっている。

東日本・西日本を分けた要因とは

日本の長い歴史の中で、東西に長い国土を持つ日本で「東日本」「西日本」の文化的差異を生み出した要因は一つではなく、いくつかの要因が長い時間をかけて重なった結果と考える。この要因には大きく4つあり、①政治の中心が分かれたこと、②交流の方向が違ったこと、③経済圏・生活文化の違い、④地理・地形による分断があると考えられる。

①政治の中心が変わったことでは、古代以降、日本の政治の中心は主に畿内(西日本)に置かれ、都の置かれた奈良や京都を中心として文化が発達し、西日本の文化の基盤となっている。一方、東日本は中世以降、鎌倉・江戸に武家政権が成立し、武家・武士の文化が形成された。

②交流の方向が違ったことでは、縄文時代に、多くの装飾を施す縄文土器や漆を用いた縄文文化は

東北など東日本が中心として栄えたが、弥生時代以降に大陸から、稲作や仏教などの文化や流行の窓口となったのは西日本である。稲作が伝わり九州な

表1 東西文化の違い

西	項 目	東
 丸型	正月の雑煮餅	 角型
 ブリ	年取り魚	 サケ
 昆布	出汁の素材	 鰹節
 牛肉	肉の好み	 豚肉
 青色	灯油ポリタンクの色	 赤色

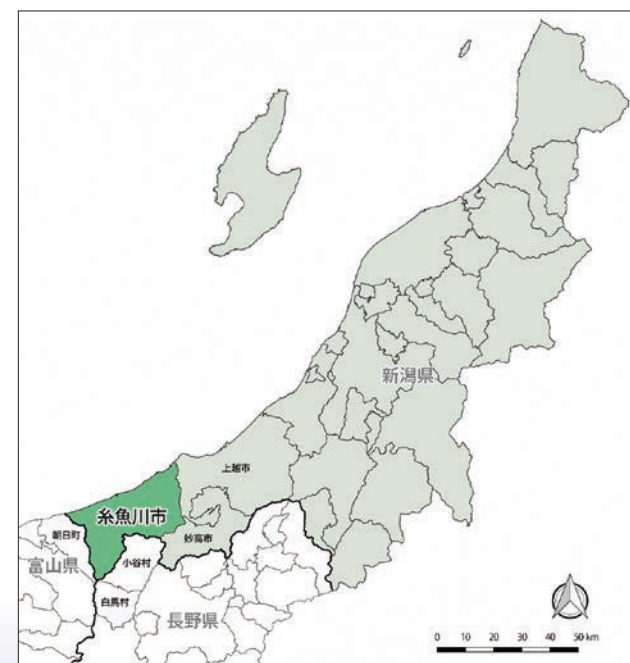


図1 糸魚川市位置図

どの西日本の時代区分では、弥生時代に突入している時期に東日本は未だ縄文時代が継続していた。大陸からの文化の流入は西日本と東日本では情報の伝達で時間差があり、この時期にはすでに西日本・東日本での文化の差異が発生している。

③経済圏・生活文化の違いでは、江戸時代になると東西で経済の仕組みも異なってくる。西日本は「天下の台所」と呼ばれた上方（大阪）では商業が盛んとなり、商人が社会の主役となり文化が発達した。一方、東日本では、徳川将軍の居城する江戸を中心に武士が社会の中心となる文化が発達した。この江戸時代の生活様式の違いは、現在も残る文化の違いの中でも食文化には大きな影響があったと考えられる。

④地理・地形による分断は、西日本・東日本の差異の要因の最も基礎的な条件であり、糸魚川とも関わりが深い。この事について詳しく見ていきたい。

東西を隔てる大山脈

糸魚川市の西端に親不知・子不知と呼ばれる場所が存在する。この親不知・子不知一帯では、断崖絶壁が海岸まで突き出た風光明媚な景色を見ることができる(図2、写真3)。親不知の岩石は、日本列島がまだ大陸とつながっていた時代(約1億年前)に陸上の火山活動でできたもので、火山灰と溶岩の破片が混ざりあっている。

親不知・子不知は古代の都（京都）から越後を結ぶ北陸道の最大の難所として知られ、人々は崖と波打ち際のわずかな間なださを通っていた。波が静かな時は汀の道だが、ひとたび海が荒れると大波が断崖まで打ち寄せ、命がけで走りぬげなければならない場所であった。そのため、大懷・小懷・大穴・小穴と呼ばれる崖の切れ込みや自然にできた

洞穴に避難しながら行き来をしていた。

このような古代から人々の往来を苦しめてきたこの断崖絶壁は、3,000m級の山々が連なる北アルプスの北の端が日本海の荒波で削り取られてできた景色である。日本列島の中心には南北に北アルプス・南アルプスと高い山々が連なっており、この山脈が東西日本の文化の隔たりに大きく関わっている。古来、情報の伝達は、これらの山脈を避け太平洋沿いの東海道、日本海沿いの北陸道、山地を縫うように進む中山道と限られたルートでの往来となっていたことが東西の文化の隔たりに作っていたのであろう。

東西の情報伝達

西日本・東日本の情報伝達は時代ごとに手段を変えながら発達してきた。古代の律令国家の下では駅制が整備され、官道を通じて情報が伝達されてきた。近世の江戸時代には、五街道の整備や北前船による流通網の発達により商業は広域となり、情報や文化も広く共有されるようになる。

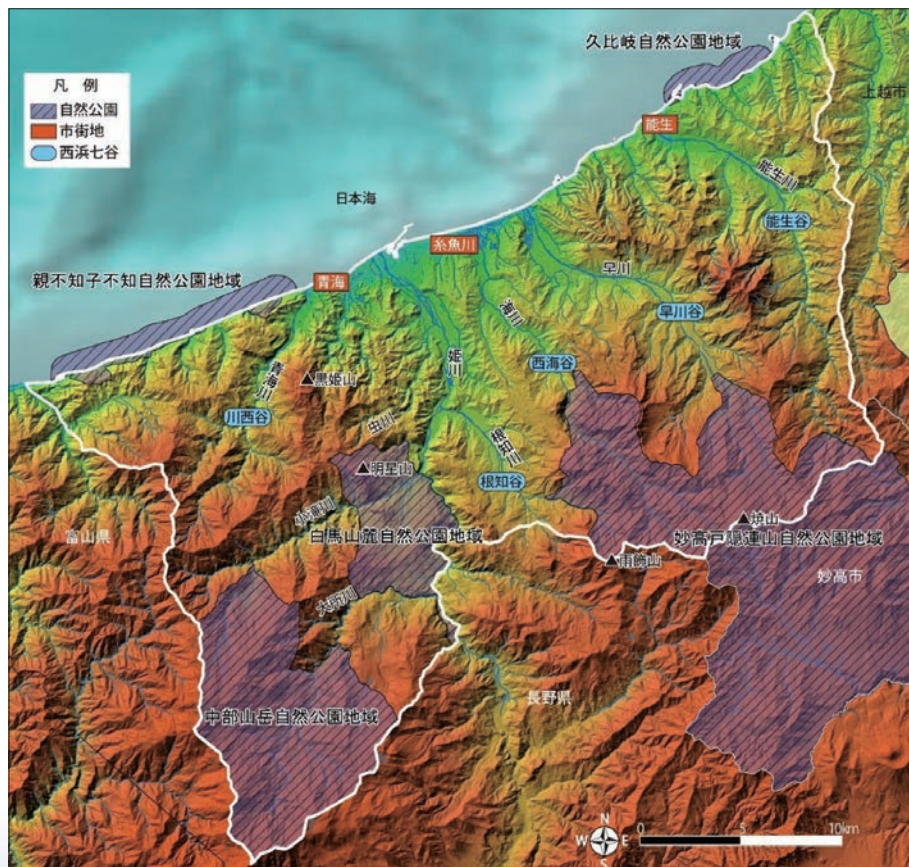


図2 糸魚川市の地形

この中でも北前船は、糸魚川とも深い関わりがある。

北前船は江戸時代中期から明治時代にかけて、大阪から北海道を日本海回りで結ぶ長距離海運で活躍した商船である。単なる輸送船ではなく、各寄港地で商品を売買しながら利益を上げる「買積船」で、上り航路では蝦夷地（北海道）から昆布・ニシン・干魚などを運び、下り航路では米・酒・木綿・鉄製品などを運んで各地に供給していた。

糸魚川には、北前船の船主や船乗りが大勢おり、その中でも大規模に経営を行っていた船主として、伊藤助右衛門家と相沢源右衛門家がある。残っている記録では、相沢家では江戸時代後期に9隻、伊藤家では明治時代に6隻の船を所有し商売を行っていた。このように廻船業が盛んであった糸魚川では、航海の安全や商売繁盛を願って信仰している神社に船絵馬や石造物が奉納された。このうち、石造物は鳥居や燈籠、狛犬、手水鉢、常夜灯などが奉納され、多くは瀬戸内の花崗岩が使われ、尾道（広島県）の石工の名前が刻まれており、北前船を通じた東西文化の交流の証となっている（写真4）。

さらに、糸魚川には、毎年4月に奉納される天津神社・能生白山神社の舞楽は大阪四天王寺の流れをくむものが伝えられ、8月の「根知山寺の延年(おててこ舞)」は、京都の流れをくむとされ、西日本から伝わったものである。また、小正月行事の「青海の竹のからかい」は、顔に施す化粧は歌舞伎の隈取りに似せたもので江戸の文化に由来するものであろう。このように糸魚川には東西日本から伝わった文化が混在している。

文化の境界はゆるぐのか

近代以降、鉄道や通信の発達により、人や情報の移動は飛躍的に活発化した。特に現代では、インターネットやSNSの普及により、地域差は急速に縮小し、生活様式は全国的に均質化しつつある。



写真3 親不知の断崖



写真4 尾道から運ばれた石材で作られた鳥居

しかし、一方で、言葉のアクセントや食文化、祭礼などには依然として地域差が色濃く残っている。糸魚川のような境界地域では、むしろ多様な文化が共存する「混合性」が際立っているともいえる。観光や地域振興の中では、地域固有の文化が再評価され、あえて「東西の境界性」を強調する動きも見られる。糸魚川においてもフォッサマグナやヒスイ文化を軸とした地域アイデンティティの形成が進んでおり、東西の接点であること自体が価値として認識されている。この地域の多様性はジオパーク活動でも生かされ活動の根幹をなす要素となっている。

今後、東西文化の境界はさらに曖昧化し、全国的な均質性が進む可能性がある。しかし、地域文化の多様性が再評価される流れも強まっている。東西の違いは単に消えていくのではなく、新たな形で再構成されていくと考えられる。糸魚川のような地域は、その変化を最も敏感に反映する場であり、東西文化の「交差点」として今後も重要な役割を果たし続けるだろう。

東日本と西日本の境界は固定的な線ではなく、歴史的・社会的要因によって絶えず変化する動的な領域である。糸魚川のような境界の地域は、その象徴的な事例であり、人や情報の交流がもたらす文化の重なりと変容を体現している。東西の境界は「ゆらぐ」ものであり、そのゆらぎこそが日本文化の豊かさを生み出しているといえるのではないだろうか。